

主人公は、ルロイ修道士と会ったとき、握手を求められ、光が丘天使園に收容されたときのことを思い出した。不安でいっぱいだった主人公は、しつかり者のルロイ修道士に優しく迎えられ、安心したが、不安が完全になくなったわけではなかった。

主人公は、ルロイ修道士に会って、天使園に收容されたときのことを思い出した。收容されたとき、主人公は、敵であるカナダ人の元へ引き取られることに不安を感じていたが、ルロイ修道士が「もうなんの心配もありませんよ」といつてくれて、うれしかった。しかし、安心はできなかった。

ルロイ修道士と作者は、非常に親しい関係だったとともに、ルロイ修道士は不安を取り除くのが得意だった。また、握手をするときに顔をしかめたのは、別れを認めたくないという気持ちもあったと考えられる。

西洋料理店へルロイ修道士は時間どおりにやってきました。話をしている、ルロイ修道士が大きな手を差し出してきた。このとき私は一瞬にして子どもの頃の出来事を思い出した。子どもの頃、「天使の十戒」という戒めがあり、その中の一か条でルロイ修道士と握手すると二、三日鉛筆が握れなくなってしまうということを思い出した。しかし、私は、こんな出来事があったということを知っているから、アピールをするような感じで顔をしかめたのである。



おぼろかしく二とまやせうく  
 わさこいことまふかか  
 ふかいことまゆかいに  
 ゆかいなことままじめに  
 重く二とま